

さあ前へ！

令和六年、輝かしい新春を迎えました。お目出度うございます。ご家族お揃いで新しい年のスタートを切られたことと存じます。

コロナの禍から何とか抜け出して初めての新春です。これからの無事を祈りたいものです。この両三年の間、私たちの詩吟を楽しむ活動は誠に不自由を極めてまいりましたが、その間にあつても千代田の仲間お互いの励まし合いがあつたこ

岳精流日本吟院

ちよあ

第 72 号

令和 6 年 1 月
千代田岳精会弘報

令和六年岳精流指標

徳

会長 鈴木 精成

とは心強い限りでした。

令和五年の岳精流統にとつて最大の慶事は、横山精真宗家の『旭日双光章』受賞でした。宗家先生の、永年にわたる吟道普及を通しての地域への絶大なる貢献に高い評価をいただいた結果であります。私たち会員としても、無上の喜びと誇りを抱くものです。

昨年の千代田岳精会は七月からの本部キャンペーンに先駆けて一月から「吟友呼び声かけ元気な教場を！」のスローガンのもと、教場仲間の拡充に取り組みました。成果としては、新入会二三名、復会七名の方々が仲間入りして下さいました。一月スタート時点から年間を通して会員が増えた教場が十一教場でした。これらに該当しない所も、もう一步の結果だったと思います。今年につながっています。

迎えた令和六年、私たちは昨年までの活動を土台にして、より一層活発な「詩吟に親しみ、詩吟とともに生きる」日常を育てたいものです。そのポイントやはり「詩吟を益々好きになること」、「多くの仲間と交流する機会をもつこと」でしょう。こうした私たちの願いを支えるために、今年の千代田は前進します。令和六年の年間スローガンを次のとおりとします。

「新しい吟友(なかま)と共に 元気な教場を！」

「会員拡充」はそれぞれの教場によって取り組む意味合いに相違があるうかと思いますが、共通して言えることはやはり相互研鑽の場には常に新しい空気が大事だということです。「現状維持は後退なり」という至言があります。このため、右のスローガンを掲げ「常に新しい吟友を呼び込む教場にしよう」と声を大にいたします。

「友呼びの一声、教場見学のひととき、地域広報へのPR」全て元気な教場づくりにつながります。それぞれの教場が置かれた条件に合わせて前進計画を立てて下さい。そして是非実現して下さい。皆の協力が不可欠です。

「研修の千代田」の伝統は今年一層充実した内容を目指します。「層別研修の充実」、「拡大研修会の開催」、「女子部研修会の開催」そして「ズーム研修の充実」等関係部門で計画を進めています。ご期待下さい。

令和六年の宗家指標が「徳」と発表されました。「人を愛する。恩に報いる。助ける。廉潔。勤勉などを心に研く」と説かれています。かみしめた言葉です。

過日訪ねた某教場で、二人の新人さんが懸命にコンダクターに取り組んでいました。その様子に感ずるものあり、絶句にまどめました。結びの転結句はこうです。「更見新人存宿志 共君高唱喜心伸」
新しい吟友(なかま)と、「さあ前へ！」







千代田岳精会 詩吟教室

@user-1c1qi8fq2i · チャンネル登録者数 249人 · 35本の動画

岳精流日本吟院 千代田岳精会の公式サイトです >

chiyoda-gakuseikai.com、他1件のリンク

▶ チャンネル登録

YouTube 公式チャンネル
「千代田岳精会 詩吟教室」



千吟会、層別研修会など各種動画が掲載されています。
チャンネル登録もよろしく
お願いいたします。

千代田岳精会

千代田岳精会のホームページです

千代田岳精会とは お知らせ 厳選 25 題 範吟一覧



保護中: 範吟一覧

このコンテンツはパスワードで保護されています。閲覧するには以下にパスワードを入力してください。

パスワード:

確定



ホームページの「範吟」は保護されています。
パスワードが分からない時は、教場等の友人
にお聞き下さるようお願いいたします。

千代田岳精会ホームページから
お知らせ

岳精流 総本部人事

◇本部広報部員

神田教場より 中野 郷泉
令和六年一月一日付

千代田岳精会人事

◇新宿第四教場

教場長 石井 寅山
令和五年九月一日付

◇桜ヶ丘教場

教場長 中島 義風
副教場長 新井 芳泉

◇清水教場

教場長 森坂 雄風
副教場長 金井 俊山
令和六年一月一日付

夜の教場新設と教場長を拝命して

新宿第四教場長 石井 寅山

新しい冒険に臨むにあたり、新宿第四教場は、
赤羽文化センターで毎月第二・四水曜日の十八時
から開催し、現役世代にも参加し易い時間帯にし
ました。また、教場間の垣根を意識せず誰でも参
加可能な教室にしています。

学び合い、共に成長し、コミュニティを築き上げ、詩吟の魅力や奥深さを共有し築くことで、生徒たちが豊かな表現力を身につけ、詩吟の魔法に触れることができるように努力いたします。

夜の教場での時間が、新たな才能の発見と深化の場となるように、楽しみながら成果を共有していければと思っております。

どうぞよろしく願います。

桜ヶ丘教場

教場長を拝命して

桜ヶ丘教場長 中島 義風

この度、一月一日付で永山教場から桜ヶ丘教場へ転籍し、教場長を拝命した中島義風です。笠前教場長からの「体調不良により教場長の責務を全うすることが困難である」との懇願から状況が状況だけに受諾させて頂きました。

永山教場では健康維持のために詩吟を自分のペースで楽しんでいただけに、教場長要請はまさに青天の霹靂です。

「会友全員の協調があつて、初めて教場は楽しい教場になる」を各々の会友が共有して「楽しい教場づくりを目指そう!」をモットーとして、教場全体でチャレンジしたいと思っています。微力ながら教場長として精進しますので何卒ご指導を賜ると共に、引き続き桜ヶ丘教場へのご協力をお願いいたします。

副教場長拝命について

桜ヶ丘副教場長 新井 芳泉

この度、副教場長を拝命致しました。まさかこのような展開になるとは、詩吟を始めてまだまだ日の浅い者にとって、驚愕のなにもでもありません。

そもそも私が詩吟を始めた動機は「大声を出して、ストレス発散ができそう」という極めて軽いものでしたから。従つて、駆け出しの自分がこんなことになるうとは、未だに正直戸惑いばかりが先行しています。しかしながら、拝命しましたからには、前向きに捉え、会の皆様にご迷惑をおかけしないよう、桜ヶ丘教場が今以上に通いやすく、楽しく、かつ詩吟上達鍛錬の場となりますよう、精一杯自分なりに精進してまいりますので、皆様、何卒宜しくお願い申し上げます。

清水教場

教場長を拝命して

清水教場長 森坂 雄風

今年の一月から細川教場長の後任として、清水教場長を拝命致しました。

伝統ある清水教場の名を汚すことなく「吟ずるのが楽しみだ」と、そのような教場を目指し会員の吟力向上と教場の発展のため微力ではありますが頑張りたいと思っています。

指導とは「伝達であり、共に学ぶ姿勢にある」との宗家の言葉をモットーに、吟友の輪を広めら

れればと思っています。今後は「礼・節」を重んじ「真善美」の心をもって学ぶことへの感謝を忘れず、吟友を迎える心を常に持つて吟の向上に努めていきたいと思っています。

これからも教場の理念である「岳精会流統の吟を正しく学び、詩吟を楽しむ。心身の健康増進に資する。会員の相互啓発と交友の場とする。千代田岳精会の発展に資する」をモットーとして努力を重ねていきたいと思っています。

副教場長を拝命して

清水副教場長 金井 俊山

岳精会に入会して私も八年が経ちました。清水教場も細川教場長から森坂教場長に代わり、私も副教場長を拝命しました。まだまだ修行中の身ではありますが、会を盛り上げてゆきたいと考えています。

メンバーのコミュニケーションも良く、成熟した仲間ですので、毎回お会いできることが皆さん楽しみにされております。漢詩や和歌などの奥深さを味わい、堪能しながら、勉強しています。現役時代のこれまでに触れてこなかった新鮮な感動を味わっています。

高齢化により、メンバーが少なくなっていますので、教場がJR中野駅から徒歩で3分の場所にあり、交通の便も良いことから、知り合いに声をかけながら増員を目指したいと思っています。

秋の昇伝審査

師範位及び上位の段位・伝位を受審!!

恒例の本部主催「秋の昇伝審査」が文化の日、十一月三日に「かわさき保育会館」で開催され、師範位及び上位の段位・伝位を目指して千代田から二二名の会員が受審され、二七件の師範位及び新段位・伝位を取得されました。(うち師範位及び上位の段位・伝位のダブル受審者は五名)

教場別 受審者数

丸の内支部三名(三件)、金町一名(一件)、永山二名(二件)、東陽町支部一名(一件)、神楽坂二名(二件)、清水一名(一件)、表参道一名(二件)、神田二名(二件)、用賀一名(一件)、ハザマ支部五名(八件)、新陵一名(一件)、新宿第三、二名(三件)

師範位及び段位・伝位別 受審者数

○準師範 三名 ○奥伝(風号) 七名
○七段 一名 ○七段・奥伝師範 四名
○八段 三名 ○皆伝(龍号) 一名
○皆伝(龍号)奥伝師範 一名
○皆伝師範 一名 ○九段 一名

◇準師範 合格者

久保 杏山(神田 教場) 三名
中屋 明山(同)
和田 之山(新陵 教場)

◇奥伝(風号) 合格者

七名

鎌田 秋風(丸の内支部)
下條 信風(丸の内支部)
中島 義風(永山 教場)
袖井 孝風(神楽坂教場)
松本 篤風(用賀 教場)
小浦場伯風(ハザマ支部)
林 實風(新宿 第三)

◇七段 合格者

一名

森坂 雄風(清水 教場)

◇七段、奥伝師範 合格者

四名

堀田 宣風(表参道教場)
三島 寿風(ハザマ支部)
宮永 明風(ハザマ支部)
宇田川清風(新宿 第三)

◇八段 合格者

三名

藤村 恵風(永山 教場)
宮野 秀風(東陽町支部)
勝村 忠風(神楽坂教場)

◇皆伝(龍号) 合格者

一名

日吉 龍久(ハザマ支部)

◇皆伝(龍号) 奥伝師範 合格者

一名

瀧澤 龍春(ハザマ支部)

◇皆伝師範 合格者

一名

菟場 龍一(丸の内支部)

◇九段 合格者

一名

中内 龍博(金町 教場)

準師範 合格者

伝統の繋がり、昇伝審査を受審して思うこと

神田教場 久保 杏山

この秋、準師範の審査を受ける機会を戴いた。担当者より、試験は筆記試験と面接との説明を受けた。吟習得年数八年超、吟歴の永さだけで受審の機会を戴いたのであろう。

準師範に相応しい力も自覚もない自分が何故?との自問もあった。受審にあたり、千代田岳精会の許証部が中心となって準師範受審の為の研修会を準備してくれていた。

これまでの昇伝審査は、幹部先生方の前で課題吟を詠ずるのが主であったが、今回の筆記試験の傾向と対策研修会は大変に有効で友好的学習の時間を頂いた。講師の徳本先生はじめ、許証部の方々の熱心な解説指導がなければ、手も足も出なかったと感じた。

師と弟子、伝承・伝統、繋がりを繋ぐとは、きつとこうした経験の中で醸成されていくのだと感じた。



準師範審査を終えて

神田教場長 中屋 明山

準師範資格審査会に参加した十一月三日は、まさに「ひとの温かさに触れた一日」であった。

筆記試験があると聞いた。数十年ぶりのことで些か心許ない心境であったが、同期入会の久保杏山氏と一緒にというのが不安を緩和してくれた。加えて、徳本先生や西川先生はじめ先輩各位の事前レクチャーが大いなるサポートとなった。会場まで乗ったタクシーの女性ドライバーもその物腰の柔らかさで、私をリラックスさせてくれた。

審査前の宗家ご挨拶で、ご自身から「旭日双光章」授与との嬉しいご報告をお聴きし、また、壇上での少し照れながらも誇らしげな宗家のご様子が、私たちの緊張感を和ませてくれた。久しぶりに会うことが出来た諸先輩方の笑顔、発する言葉の温かさが身に沁みる。

面接して戴いた前澤精淳先生の優しい励ましで審査を終えることが出来た。

奥伝（風号）合格者

「奥伝」審査を受審しての想い

丸の内支部副教場長 鎌田 秋風

去る十一月三日に奥伝を受審させて頂きました。入会して十二年を顧みる時、大きな転機を迎えたように感じています。

吟に興味があつて入会したわけではなかったが、「真善美」を聴いて気持ちが高ぶり入会を決意したことと多くの諸先生方の熱意のあるご指導、さらに多くの吟友に巡り会えて今まで続けて来られたことに我ながら感心している次第です。

六月に、腫瘍が見つかり現在抗がん剤での治療中です。この先何年詩吟をできるか分かりませんが、宗家信条「真善美」を一生の糧として自己研磨に励むと共に会の発展に頑張つて行こうと思っています。

諸先輩及び諸先生方々の一層のご指導のほどよろしくお願いします。

奥伝審査を受審して

丸の内支部副教場長 下條 信風

今年で詩吟を始めて十一年目です。早いもので十年が経過しています。

伝位はあまり意識したことはありませんが、諸先輩が徐々に上位伝位に上がっていくのを見てみると、自分もいつかそうなつて行くんだろうと漠然と思っていました。

私は四年前から広報の仕事をしており、奥伝以上の審査会も仕事で写真・取材などしていたので、今回も特に緊張感はありませんでした。

「風」号も十年たったのか！という感慨はありましたが、まだまだ詩吟の方は未熟で、「風」号に相応しいのか否かはわかりません。これまでご指導頂いた諸先生に感謝申し上げると共に、これを契機として、更なる上を目指していきたいと思

ます。

「奥伝」審査を受審して

永山教場 中島 義風

桜ヶ丘教場長（令和六・一・一より）

この度、奥伝の昇伝審査を受審した。自分では平常心で審査に臨んでいると思っていたが、今まで経験したこともない誤読を三回もするという散々な出来であった。振り返れば、平成二十年東北大震災の年に詩吟を開始以来、途中一時的な中断はあったが、今日まで詩吟を楽しく継続できたことは詩吟の持つ奥深さと吟友との楽しい交流があつたからこそ、と痛感している。

この間、宗家先生や奥村先生の教室で数年詩吟を学び、詩吟の楽しさを実感し、武道館での合吟コンクール等へも出場して詩吟の難しさを実感できたのも一因となっている。

現在、年齢も八十歳を越え、いろいろな面で老いを感じているが心身の健康維持と豊かな老後を送るためにも詩吟を引き続き継続して、私が千代田岳精会の二十五周年記念大会で鈴木会長他諸先輩の詩吟に感動したように聴く人に少しでも感動を与えられるような吟詠が出来るように精進したいと念願しています。

奥伝をいただくことになって

神楽坂教場 袖井 孝風

足の不自由な夫の付き添いとして神楽坂教場に出かけたのが、私と詩吟との出会いでした。詩吟には何となく右翼っぽいイメージがあるので敬遠していたのですが、耳塚昇風先生に誘われて千代田岳精会の末端に連なることになり、あつという間の十年でした。自分でも、まさかこれ程長く続けられるとは思ってもみませんでした。詩吟の奥深さに目覚めたことに加え、詩吟の仲間たちとの交流の楽しさが継続を可能にしたようです。高齢になっても朗々たる声で吟じていらつしやる方々に感銘を受け、心身の健康に及ぼす詩吟の効果に驚かされます。私自身、歳の割には張りのある声を保っていられるのは詩吟のおかげかもしれません。

今後は奥伝という資格に恥じないよう一層努力を重ね、詩吟の効用を多くの人に伝えていくつもりです。

「奥伝・風号」を受審して

用賀教場長 松本 篤風

十一月三日、かわさき保育会館での秋の昇伝審査会で「奥伝・風号」を受審致しました。

当日は九時集合で、まず受審者全員での吟礼・会詩合吟が行われた後、指定された三つの受審室に分かれ、三名ずつの一組で順番に入室して受審致しました。

私は一か月ぐらい前から指定された絶句二題と俳句二句を暗譜する練習を致しました。当日は順番が早かったので、一番目の三名一組となりました。審査の先生から自分の好きなものを吟詠するようにとのお話でしたので、「潮来の夕」(角光 嘯堂)を選びました。俳句も吟技があるのかな？と思っておりましたが、もう結構です、と言われましたので内心ほっと致しました。

また、審査日より一週間以内提出で「岳精流日本吟院に入会した動機と今日までの経過、並びに現在の心境について述べよ」を原稿用紙で提出する論文課題が出され、郵送で提出致しました。現在の心境としては入会四五年では感じなかった詩吟の奥深さ、面白さ、楽しさを最近、少しずつ感じるようになってきたように思っており、引き続き精進努力していきたいと思っております。

奥伝を受審して

ハザマ支部副教場長 小浦場 伯風

久々の「かわさき保育会館」での受審でした。開会式の後、三階の実技(吟技)の会場に向かいました。三名一組ずつの最初の組で、和室の会場に入場し、秋山精正先生の前で吟じさせて頂きました。発声練習もせずに声が出るか心配でしたが、何とか吟じることができました。千代田で顔見知りの三名の方と一緒に受審で心強かったのと、三名共、同じ吟「潮来の夕」だったのが印象に残っています。

早いもので平成二十四年に入会してから十一

年経ちました。私の所属教場は、幹部会員の健康等、色々な問題を抱えておりますが、教場の仲間と力を合せて頑張りたいと思います。

詩吟の世界も高齢化しています。若い新しい会員の獲得に努力すると共に、受審日当日の天気のような明るく暖かい教場を目指したいと思っております。

奥伝授与のこと

新宿第三副教場長 林 實風

平成二十四年に入会した動機は当時の新宿ブロック長酒井繁行氏(故人)が、高校の同級生であり同期会の折度々誘われて取りあえずと軽い気持ちで誘いに乗りました。

入会時は詩吟には全くの初心者でしたが、初吟会とか温習会とか昇伝審査会等の発表会に参加、特に区連のコンクールに誘われるまま出場続けていた所、入賞の賞状を頂くことがあり驚きと且つ意欲となりました。数年が過ぎた頃、酒井ブロック長の突然死、さらに明治安田生命ビルからの会場移転、同時にコロナ感染症の対応、それに伴ってZOOMによるパソコンでのオンライン教室が始まり、やっと北区立赤羽文化センターを本拠地とした詩吟教室に定着しました。

今尚詩吟を続けられている理由は、詩吟には年齢はそれほどハンディにならず健康に良いことと、人の前で大きな声を出して吟じられる様になったのは少しだけ吟に自信が付いたからだと思います。

皆伝（龍号） 合格者

皆伝を受審して

ハザマ支部教場 日吉 龍久

平成二十年に千代田岳精会に入会しました。同時に「剣詩舞研修」に人会しました。

思い返せば、私は良き先輩仲間にもたまたま先生に恵まれ幸に過ごして参りました。

こんな私ですが人生最悪の時もありました。突然のくも膜下出血に襲われましたが、何の後遺症もなく五年が経ちました。最初の処置が早かったからと言われています。その場にいらつしやいました吟友や先生には感謝してもしきれない気持ちで一杯です。ありがとうございます。

今後は皆伝という雅号に恥じないように精進してまいります。

皆伝（龍号） 奥伝師範 合格者

「龍号」を受審して

ハザマ支部副教場長 瀧澤 龍春

十一月三日晴天の下、川崎の会場に伺い緊張しながら受付をすませて席につき、午前は筆記試験で終わり、午後は面接と課題吟です。

軽く昼食をとり午後の部に臨みました。宗家、宗嗣、山口先生の前で宗嗣のコンダクターで課題吟の「北海道讃歌」森みつ作、を吟じ終えることが

でき、ほつと致しました。宗家から下音の研究をしたら良いですね、とアドバイスを頂き終わりました。

廊下に出て待つこと十五分位、今度は一人ずつ部屋に呼ばれ面接です。人前で話すことが苦手な私は何を話したか覚えておりません。宗家からは毎月発行の「今月の言葉」を声を出して読むと良いですとおっしゃって下さり、終了です。

今までお世話になった皆様に感謝とお礼を申し上げます。今年も良い年でありますように！



ハケ岳高原ライン
東沢大橋（赤い橋）

年男・年女

今年の干支は甲辰（きのえ・たつ）です。



八回目の年男を迎えて

丸の内支部教場長 菟場 龍一

今年の干支は辰年にあたり、私は生まれた年を含め八回目の年男を迎えました。「光陰矢の如し」実に、時間の過ぎていくのが早く感じる今日この頃です。

さて、千代田岳精会に入会して、十六年八か月が過ぎました。思いおこせば、会社のOB会に出席した時、会社の先輩でもあり、学校の先輩でもあった高橋先輩から、詩吟のお誘いを受け丁度、その頃、今は亡き親父が晩年、詩吟をやっていたのを思い出し、「詩吟をやってみたい!!」と思っていた矢先でした。

即、入会をし現在に至っております。

これからは吟友の仲間を増やし、吟友を大切に、「真善美」の精神を忘れることなく、「動かさる」と山の如くを今年のモットーにして、充実した一年を、頑張りたいと思います。

詩吟を人生の友とし、精進してゆく覚悟です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

「年女」の年を迎えて

金町教場 小野 弘子

先日は地区センター祭りに参加するため、四〇年ぶりに着物を着ましたが帯の締め方を忘れていて、教室のお友達に教わり助かりました。久しぶりの着物に若いころを思い出し、良い一日でした。

月日の経つのは早いもので令和六年は私の年「辰年」です。私もひ孫のいる年齢ですが何とか健康には気をつけています。朝は五時に起き三〇分ですが家の周りをウォーキング、その後ラジオ体操の仲間に加わり、少しでも体力をつけています。皆さんと会い、話をするとなんか情報を知ることができ勉強になります。

初めて吟に出会い、少しずつですが私に合っているように思います。今後とも長く吟じていけるように頑張つてまいります。

年男に向けて思う

神楽坂教場 中津留 準泉

自分ではいつまでも若いつもりで過ごしていましたが、今年七回目の年男になると聞き、未だに成熟していない自分を悟り、愕然としました。

詩吟は神楽坂教場長の勝村氏に勧められて六年前より始め、教場長や教室の皆様の指導や励ましで頑張つて来ましたが、不器用で音痴を自覚する私はなかなか上達をしません、それでも詩を吟ずることはとても楽しく、吟じているときは最

高の幸せを感じます。年男になる今年はさらに励んで上達し、私自身が楽しいだけでなく、聴く人にも楽しさを与えられる吟を目指します。

人生一〇〇年時代、次の年男を迎える機会もあると思う、それまでに人間的には自分を磨いて成熟を目指すとともに、詩吟もさらなる研鑽を重ねて上達し、充実した人生を過ごしたいと思っています。

年男のたわごと

志茂教場 平井 武山

往時の国粋主義、軍国主義はなやかなりし頃の言い方をすれば、皇紀二六〇〇年（昭和十五年）六月十日生まれの八十四歳の辰年の年男です。生まれた年を入れれば八回、年男を迎えたことになり今年が間違いなく最後だなどと思うと何となく感慨を催します。皇紀二六〇〇年はおめでたい年で、国でお祝いしたんだぞ、と何度か自慢したのを覚えております。

年男には縁があり、千代田の神田教場に入会したのも十二年前の十一月でした。艶歌が好きで、無名のプロ歌手が素人に教える教室を希望したのですが満員ですからとすげなく断られました。

その直後、昔の仕事上の先輩から、詩吟を始め杉並公会堂で大会があるので応援に来て欲しいと言われ、行きました。これが良い意味での運の尽きになりました。大会後の懇親会で金も払わず、勧められるままに飲み食いし、途中で無銭飲食に気付きました。代償に一期四ヶ月だけ入るつもりが、意外に興味深く、飽きっぽい私には珍し

く今日まで続いております。

楽しく老いる

草加教場 青木 恭山

たしか十二年前、還暦を迎えた私に原稿の依頼があった。その年に生まれた二番目の孫は、もう私の背をこえた。

孫の成長とともに、私は老いてゆく。それは止めることの出来ない流れである。その流れにジタバタしながら、楽しみたい。娘や孫達といっしょに行く年二回のデイズニー、もう八年続く。そして夏の旅行。

絶叫大好きな私は、ビックサンダーブラッシュ何度でも乗れる。両手を広げ大声で叫ぶ。気分は最高だ。七才になる孫は怖がりなのでまだ乗れない。彼女が乗れる様になるのが先か、私のリタイアが先か。

私の二回よりも上で亡くなられた大先生のように、生きていることを大切に、そしてこれから今までもと同じ一日一日を過ごし、老いてゆくことを楽しみたい。



干支を迎えて

永山教場長 藤村 恵風

定年後も続けられる趣味として、詩吟を選び早や十三年。月日の経つのが本当に早い。コロナ禍での教場開設等、思いがけないことがありましたが多く仲間、良き友、良きご縁に恵まれ、詩吟が出来ることに感謝です。

これからも健康に留意し、気負わず、息切れしない、明るい楽しい教場作り、吟友の輪を広げて行く所存です。皆様のご健康とご多幸をお祈りし、今後ともご指導よろしくお願いします。

ご縁を繋ぐ詩吟

表参道教場 奈良 吉花

明けましておめでとうございます。

岳精会会員の皆様にとつて、素晴らしい一年になりますようお祈り申し上げます。

二〇二〇年九月より千代田岳精会表参道教場にて精進しております。

詩吟の世界は奥深く、吟譜だけでなく漢詩の意味を考え、情景を思い浮かべながら吟ずることの難しさを日々実感しております。この課題を克服できるよう、徳本先生のご指導の下、教場の皆様と共に今後も練習に励みたいと思っております。

また、詩吟のスキルアップは当然のことながら、まず何よりも岳精会の皆様のように、人と人との繋がりを大切に、詩吟を通じたご縁の繋がりに

感謝の気持ちを忘れることなく、今後も詩吟を楽しんで参りたいと思っております。



八ヶ岳高原大橋

短歌「よもの海」紹介

ちよだ編集部

詩吟教本（天の巻）二五六ページを開くと短歌「よもの海」が掲載されている。

よもの海^{うみ}みなはうかろと思^{おも}う世^よに

など波風^{なみかぜ}のちちさわぐらん

明治天皇御製

【通釈】四方の海にある国々は皆兄弟姉妹と思う世になぜ波風が騒ぎ立てるのであろう。

【語釈】

★よも…四方。東西南北、又は前後左右の四つの方向。あちらこちら、いたる所。

よもの海…「四海」。「四海」には「国家・天下・世の中」の意味がある。

★はらから…同腹の（＝母を同じくする）兄弟姉妹。転じて（一般に）兄弟姉妹。「はら」は腹、「から」は「うから」「やから」の「から」で、血縁関係を意味する。

★など…（副詞）↓どうして、なぜ、▽疑問の意を表す。どうして…か、いや、…ない。▽反語の意を表す。

【鑑賞】この歌は、故D・キーン（米国出身の日本文学研究者、日本国籍取得・永住）、平山周吉（評論家・慶応義塾大）、一ノ関忠人（歌人、國學院大に学び岡野弘彦に師事）、本間光徳（国際基督教大）等によって詳しく研究されている。以下、一ノ関忠人の評論を要約・引用します。

日露戦争が始まった年に詠まれた

・明治天皇は生涯に一〇万首を超す歌を詠まれている。日露戦争が始まったこの年（1904年・明治三十七年）は日々四〇首、年間に一万首の和歌を詠まれた。

この歌はその内の一首である。そしてこの一首はとりわけよく知られた歌であった。英訳されてルーズベルト米大統領をも感動させたという逸話もあり明治天皇の「平和愛好の御精神」が強調された歌である。

・日露戦争の開戦にあたって、明治天皇には危惧があった。世界は全てが兄弟姉妹である平和な時代であると思っているのだが、どうして波風が立つような動乱の兆しが見えるのだろうか。このような内容になる。一読して戦争忌避、平和愛好を感じて不思議ないだろう。

日米開戦を問う御前会議で「よもの海」引用

・それから少し時間が経ち、1941年（昭和十六年）9月6日——この日、日米開戦の是非を問う御前会議が開かれた。

出席者は近衛文麿首相以下、十五名。会議の最後に昭和天皇は異例の行動に出る。明治天皇

のこの歌を読みあげたのである。

当時、陸軍軍務科高級課員だった石井秋穂大佐は事務方として参加した。冷静な觀察記録を記した「石井秋穂大佐回顧録」に記された御前会議の最後の様子は次のようである。

御前会議では「最後に天皇陛下は御親（みづか）ら御発言あそばされ、先ず『枢相（原嘉道枢密院議長）の質問に対して統帥部が答えないのは甚だ遺憾である』と仰せられ、ポケットから紙を御出しになり、『四方の海 皆はらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ』との明治天皇の御製を二度朗読あらせられ、次のように発言された。『自分は常に明治天皇の平和愛好の精神を具現したいと思っておる』

・天皇は大元帥でもある。この明治天皇の歌を読みあげたということは、あきらかに戦争不可、外交努力をいっそう推進せよという意志の表明であろう。ところがこの国は戦争の道を選択した。天皇の意向を無視するがごとくに。そこに何があったのか。

・それを解くカギは、佐佐木信綱『明治天皇御集 謹解』と渡辺幾治郎『明治天皇と軍事』、それに「朝日新聞」1942年（昭和十七年）3月10日の渡辺の謹話の記事である。

「よもの海」の歌は、明治天皇が日露開戦当初に詠まれた和歌で、「そして畏多いことながら、今上陛下の大東亞戦に臨ませられる大御心も明治

天皇といさゝかもお変わりあそばされぬのである」（朝日新聞記事）

・関係者は、昭和天皇が提起した明治天皇の平和愛好の歌、それは戦争の回避を意図するものであったが、いくつかのこの歌の解釈をめぐる論を参照することによって、開戦への裁可と読み替えてしまった。

・昭和天皇は、このような戦争を促進する解釈がなされることを思いもしなかったのではないか。この歌を出せば、戦争への逡巡が生まれるはずだと考えていたのではないか。

・後に昭和天皇が、文学のあやというような発言をされたことがある。その「あや」は、こうした問題と繋がっていたのではないか。昭和天皇は終生短歌を愛し、作り続けておられたが、終戦の決定の折には、そのような曖昧な和歌を持ち出すこともなく決然と敗戦を認められた。

短歌「よもの海」は令和五年十月の「ことぶき

吟詠の集い」にて役員吟詠で吟じられました。

温故知新、故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る、という言葉が浮かびました。

現代においてなお武力による国家間または国内の現状変更が横行するなか、明治天皇、昭和天皇の思いを知り、その心に触れることができるのは詩吟の喜び、愉しみです。

令和六年度 昇伝審査指定吟題

初伝

将に東遊せんとして壁に題す 釈 月性

画眉鳥 欧 陽脩

中伝

馬上偶成 高杉晋作

花下に酔う 李 商隠

※短歌(自由選題、A、B、C型のどれでもよい)

たわむれに 石川啄木

葛の花 釈 迢空

奥伝

慈恩塔に題す 荊 叔

関山の月 儲 光羲

※俳句(自由選題、教本の中から選ぶ)

梅一輪 嵐 雪

名月や 一 茶

皆伝

登高 杜 甫

小楠公 松口月城

『新 会 員 紹 介』

◇用賀教場

鯉沼 宏治氏 (七月入会)

「詩吟」と聞いてもあの川中島の決戦を詠った鞭声肅々の一節を思い浮かべる程度でしたが、近年八十の齢を迎える年頃になって心身の衰えを意識し始め、特に喉の衰えや飲み込み時にむせたりすることが多くなり、誤嚥の心配も感じるようになっておりましたところ、家内か

ら世田谷区報に掲載の詩吟教室を勧められ、昨年六月用賀教場を見学させて頂きました。当日の参加者は八名程度でしたが、皆さん和気藹々とした雰囲気の中、熱心に吟詠に取り組み、おられることに好感を覚えると共に、松本教場長の懇切なるお世話ぶりに、見学だけでというわけにはいなくなり、入会させて頂きました。

以後半年が経過しましたが、吟詠の方はまだまだヨチヨチ歩きもよいところですが、少なくとも意識して大声を出すことは身体にも良い効果があるように感じておりますので、何卒宜しくご指導ご交誼のほどお願い申し上げます。

◇金町教場

坂下 利恵子さん (八月入会)

金町教場では一番新しい会員さんで原田ひとみさんの紹介です。原田さんが全国大会の構成吟にとっても感動されお声掛け頂きました。

坂下利恵子さんは若い時楽器をされていたとのこと、音感の良い方です。良いお声で節調抜群、自信を持って吟じて頂きたいです。楚々とした美人でまだまだ若くこれからが楽しみです。

飯塚 治夫氏 (十月入会)

九月に教室見学に来られ十月入会されました。何とプロの浪曲師(広沢虎春)です。とても良いお声三本で楽々と吟じられます。岳精流の節調も直ぐマスターされました。

背が高くスマートでダンディーな方ですが、若い時は相撲部屋からスカウトされたとのこと

とです。まだ若く期待しております。

井上 美知子さん (十月復会)

以前日暮里教場の会員さんでまた詩吟を楽しみたいと金町教場に入られました。

ご自宅は教室の近くで以前も金町に二、三回参加されたこともありました。

きれいなお声で以前は八本で吟じられていてこれからまだまだお声も出られ楽しんでいただきたいと思います。

◇神楽坂教場

椎名 正道氏 (九月入会)

私は山岳一辺倒の人間で若い頃はロッククライミング、結婚し子育てを終え四〇代後半からは日本全国三五〇〇山の遍歴を続けて参りました。海外の山々を入れると四〇〇〇山を超える実績を残して参りました。日本国内の百名山に対し、不束ですが自作漢詩(七言古詩)を創作しました。

其れを山仲間の前で朗々と吟じたい衝動にかられ、二〇二三年九月、八八歳の手習いで神楽坂教場にお世話になることになりました。

諸先輩方の良きご指導により、楽しく詩吟の世界を覗かせて頂いております。一生懸命頑張つて一歩でも早く夢を達成したいと思っております。皆様の芳醇なるご助力、よろしく願い申し上げます。

◇みなとみらい教場

古澤 公章氏 (十月入会)

八月の或る早朝。横浜港の波打ち際をウォーキング中、芝生の上でラジオ体操に勤しむ一団

に紛れ込みました。内のお一人、宮本さんと挨拶を交わしたのがご縁の始まりです。

そのグループは、詩吟のお仲間達。片や、我流で「川中島」など口ずさみ、いつか正規に勉強をと考えていた闖入者。偶然の巡り合わせの、不思議なマッチングでした。

教場は、和気に満ちた同好の士の集りで、会長の温かい指導と教場長の行き届いた気配りとが、格調高い気風を醸し、毎回緊張しつつも愉しく吟詠に努めております。

当面の課題は陋屋内での「吟」の発声練習。「ンンン」と蜂の羽音のよう」と言う、娘の不評解消。目指すは吟歴十年に近い加藤博善さんの吟詠。「家族皆が聴き惚れています」と仰る。その高みへの早期到達です。

訃報

◆岩崎 精慶氏（元副会長、丸の内支部教場）

令和五年十一月八日逝去されました。

享年九十六歳。昭和六十二年入会。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



岩崎先生ありがとう

監査役 八田 精猷

千代田岳精会は、飯田精鷹初代会長が明治生命の社内同好会から昭和六十年に千代田教場を開設、岩崎先生は磯田精信元副会長と並び副会長として今日の岳精流を背負う会に育てた大功労者であった。

幹部社員として定年を迎え、退職後は詩吟の指導者として丸の内第二教場を立ち上げられ、数多くの会員を入会、育て上げられた。

ここから草加、日暮里、鎌倉、桜ヶ丘、永山、金町教場が独立して丸の内ブロックへと繋がっている。千代田の成長と共に直接指導された教場は、丸の内ブロック関連の他、東陽町、清水、鎌ヶ谷等、漢詩・詩吟への深い造詣と格調高い指導に他教場や岳精流の他会からも教室に参加希望が多い先生だった。

特に吟詠コンクールでは武道館合吟コンクール、独吟共に吟者は先生の指導を受けた多くの会員が晴れの舞台で吟じ、優勝トロフィーを手にする至極の時を持った者が五指に余った。私が入会当時、先輩の言葉に「詩吟にはその人の品格が現れる。人格者から指導を受けなさい」と言われたことをはつきり記憶している。千代田最高の師範であった。

コロナ感染の拡大で、教場が開けなくなるまでご高齢にめげず幾つもの教場へ毎月元氣に出かけられていた。そこには人柄とご指導を慕って所属を問わず数多くの会員が、千代田にとどまら

ず他会の会員の姿も見られていた。

特に明治生命丸の内本社ビルが改築となり、本部組織や教場が路頭に迷った時、新宿駅西口にあった安田生命旧本社ビルに余裕が有ることに着眼、昔の部下であった管轄部署の担当部長に折衝して地下の会議室を幾つか使用させてもらえ、最多期には十三の教場が平日は毎日使用する盛況で幹部会議、階層別研修会、自主研修会、千吟会、更には周年大会、温習会にまで使用させてもらえたのは岩崎先生のご功績であった。

筆者は入会以来二十五年ご指導を受け、気が付くと健康に恵まれ流統最高伝位を頂くまで詩吟に没入出来たのも先生のお陰と感謝している。

ご逝去は悲しく、寂しいが、九十六歳という天寿、ご本人にとっても十分に人生を楽しみ堪能された素晴らしい生涯であったと思っている。

編集後記

令和六年は早々から大惨事が続きました。北陸、信越地方の震災を受けられた方々に心よりお見舞い申し上げます。

「薪を担うて翠岑を下る 翠岑路は平らかならず 時に憩う長松の下 静かに聞く春禽の声」
良寛さんの「時に憩う」ですね。共に困難な状況に、時に憩うて英気を養い、復興と平常を取り戻したいものです。

ちよだ七二号も多くの会員皆様からご寄稿を頂き、ありがとうございました。

和田 山